

西張(2)遺跡の考察

中村哲也

1. はじめに

筆者は、平成8年に西張(2)遺跡の調査を担当し、縄文時代早期の集落を検出した。その調査成果は既に報告書として刊行したが（中村他 1998）、十分な考察を果たさないままであった。そこで、本稿では西張(2)遺跡を理解するために縄文時代早期の集落を中心とした幾つかの問題について補足し、考察を試みるものである。

2. 遺跡の概要

西張(2)遺跡は青森県三戸郡福地村大字法師岡字西張に所在する（図1）。馬淵川の右岸、標高30m前後の河岸段丘上に位置し、縄文時代早期白浜式期の住居跡が6軒、土坑1基が検出された。この他、縄文時代後期中葉の住居跡、土坑、配石、早期後葉から前期前葉の土坑、縄文時代のものと考えられる溝状土坑も検出されている。

遺跡を乗せる段丘は田面木段丘に相当する。遺跡付近では300～500mの幅を持ち、馬淵川へと注ぐ支谷によって南北を限られた平坦面をなしている。遺跡はこの平坦面の南西寄りに営まれている。すなわち、より河川に近く、南を限る支谷に接している。後期の遺構はこの中でもより南西側に位置する。これに対して、早期の遺構はより平坦面中央部に近い位置に築かれている。

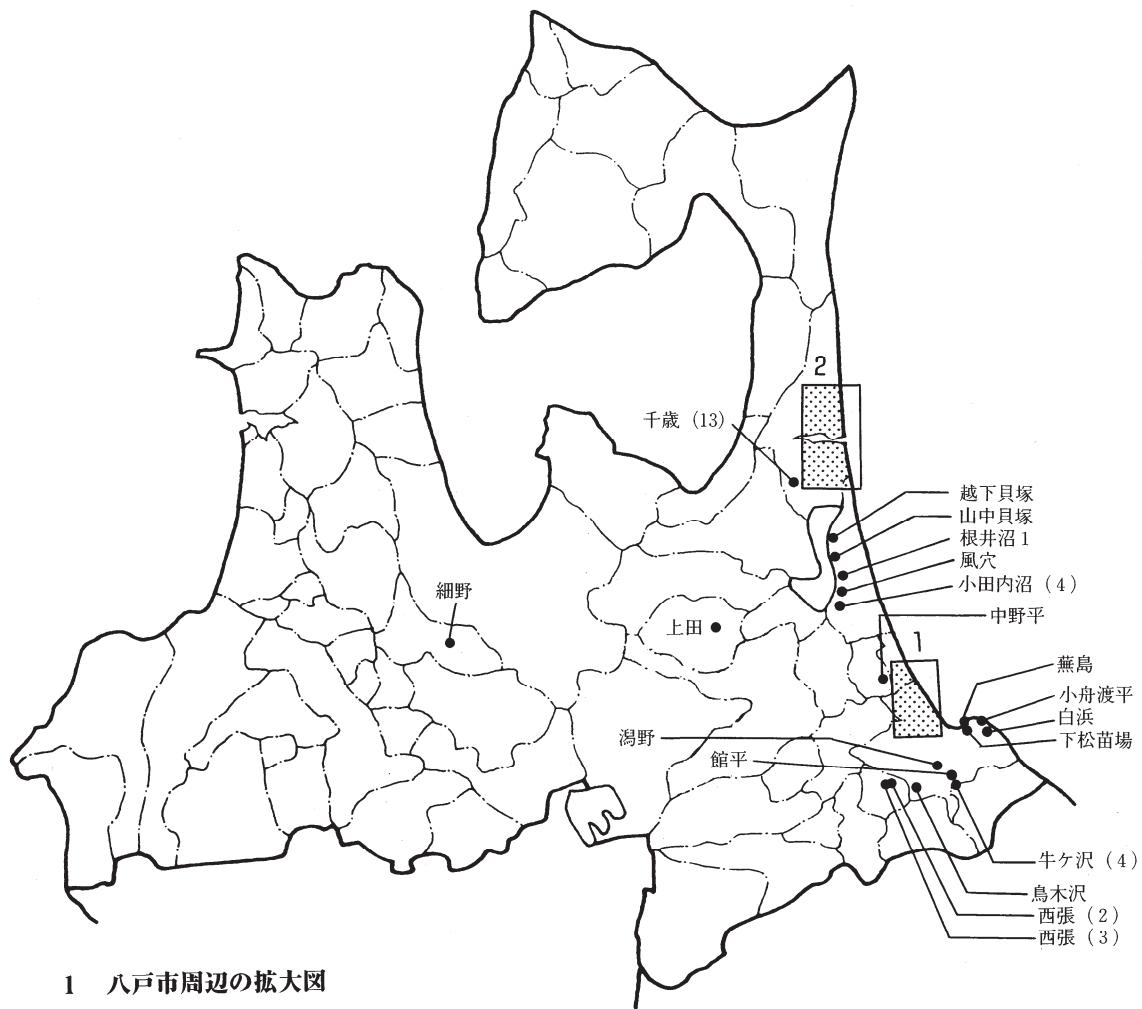
早期の住居跡・土坑は重複せずに、約60×60mの範囲に散在する（図2）。この範囲では標高差はほとんどなく、1m以内に収まる。遺物は土器・石器、自然礫が出土した。各住居跡周辺を中心として出土し、一見して切れ目なく分布する。主要な遺物包含層である第Ⅲ層から出土した遺物は原則として三次元における位置を記録して取り上げた（図3・4・6）。ただし、掘り下げ時にジョレン等で移動した遺物は記録していない。また、遺構内の遺物も三次元における位置を記録して取り上げた。位置を記録して取り上げた遺物は土器2348点、石器・自然礫713点である。土器の接合作業を実施した結果、遺構内と遺構外の遺物が接合すること（註1）、最大で45m離れた位置から出土した破片が接合することが確認された。また、接合の方向性もおおよそ3方向が認められ、ランダムに接合するわけではない（図5）。土器は概して小片で接合率が低く（註2）、器形復元できるものはなかった。

自然礫は約700点出土した。本遺跡の基盤となる八戸火山灰層・高館火山灰層の中に礫は含まれず、段丘崖からも離れているため、人間の手で持ちこまれたものと考えられる。石器・自然礫のなかには被熱して赤化したものがある。

早期住居跡の下部構造は以下のようなものである。

- ・径3～4mの楕円形ないし隅丸方形の掘方である（ただし第6号住居跡は除く）。
- ・掘方底面の立ち上がり際に住居中央方向に向いた小規模なピットが巡る。床面中央にピットは認められない。
- ・生活面から底面までの深さが約60～70cmである。

これらの特徴から、上屋構造は宮本長二郎氏のいう伏屋A（宮本 1996）が想定される。そのほか上屋構造には直接関係ないが、炉が認められないことも特徴である。



1 八戸市周辺の拡大図



2 六ヶ所村周辺の拡大図

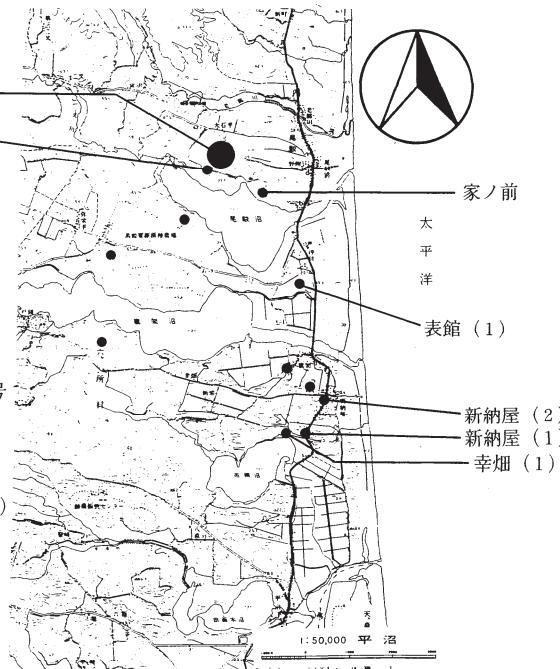


図1 遺跡位置図

白浜式出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構種別	住居数	備考	文 献	発行年	発行主体
1	幸畑(1)	六ヶ所村	住居	2		幸畑(4)遺跡・幸畑(1)遺跡	1998	青森県教育委員会
2	表館(1)Ⅱ地区	六ヶ所村	住居	2		表館(1)遺跡V	1990	青森県教育委員会
						表館遺跡	1981	青森県教育委員会
3	上尾駿(2)	六ヶ所村	住居	2	縄文使用の白浜式出土	上尾駿(2)遺跡(I)	1988	青森県教育委員会
						上尾駿(2)遺跡II	1987	青森県教育委員会
4	新納屋(1)	六ヶ所村				むつ小川原予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	1976	青森県教育委員会
						新納屋(1)遺跡	1999	青森県教育委員会
5	新納屋(2)	六ヶ所村				新納屋遺跡(2)発掘調査報告書	1981	青森県教育委員会
6	家ノ前	六ヶ所村			平成2年度試掘	家ノ前遺跡II・幸畑(7)遺跡II	1993	青森県教育委員会
7	沖付(1)	六ヶ所村				沖付(1)遺跡	1986	青森県教育委員会
8	大石平	六ヶ所村				大石平遺跡II	1986	青森県教育委員会
9	上田	七戸町				上田遺跡	1996	青森県教育委員会
10	根井沼(1)	三沢市	住居・土坑	2		根井沼遺跡発掘調査報告書III	1988	三沢市教育委員会
		三沢市			爪形刺突無 絡状体多	根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書II	1988	三沢市教育委員会
11	小田内沼(4)	三沢市	土坑	2		小田内沼(1)・(4)遺跡	1992	青森県教育委員会
12	山中(1)貝塚	三沢市			貝層から11m北側	山中(1)貝塚	1992	三沢市教育委員会
13	越下貝塚	三沢市				越下貝塚隣接地試掘調査	1994	三沢市教育委員会
14	風穴	三沢市				風穴遺跡	1996	三沢市教育委員会
15	中野平	下田町	住居・土坑	12	重複あり	中野平・向山(4)遺跡	1991	青森県教育委員会
16	長七谷地1号	八戸市	住居	1		桔梗野工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1980	八戸市教育委員会
17	長七谷地7号	八戸市				長七谷地遺跡発掘調査報告書	1982	八戸市教育委員会
18	長七谷地8号	八戸市	住居	1		長七谷地遺跡発掘調査報告書	1982	八戸市教育委員会
19	長七谷地貝塚	八戸市				長七谷地貝塚	1980	八戸市教育委員会
20	鳥木沢	八戸市				八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書III	1986	八戸市教育委員会
21	見立山(1)	八戸市				見立山(1)遺跡・弥次郎窪遺跡II	1998	青森県教育委員会
22	根城	八戸市	住居	3	重複あり 全体が中世の遺構と重複	史跡根城跡発掘調査報告書IV	1983	八戸市教育委員会
						史跡根城跡発掘調査報告書V	1983	八戸市教育委員会
23	白浜	八戸市				青森県八戸市白浜遺跡『日本考古学年報』7	1955	江坂 輝彌
24	館平	八戸市				青森県三戸郡館平遺跡『日本考古学年報』4	1958	江坂 輝彌
						白浜・小舟渡平式土器にかわる館平・遺跡出土の早期貝殻文土器について『奥南』1	1980	杉山 武
						館平遺跡	1988	八戸市教育委員会
25	潟野遺跡	八戸市	土坑		平成10年度青森埋文試掘調査による			
26	牛ヶ沢(4)	八戸市	住居		未報告			
27	壳場	八戸市				壳場遺跡発掘調査報告書 大タルミ遺跡発掘調査報告書	1985	青森県教育委員会
28	西張(2)	福地村	住居・土坑	6		西張(2)遺跡	1988	青森県教育委員会
29	西張(3)	福地村			時期不明の竪穴遺構1基	西張(3)遺跡	1996	青森県教育委員会
						石焼沢・西張(3)遺跡	1987	青森県教育委員会
30	細野	浪岡町				浪岡町細野遺跡出土の早期貝殻文土器・石器『奥南』3	1984	杉山 武

早期住居跡の1軒に貼床が認められ、これを全量採取して水篩選別法により微細な炭化物を回収した。その結果サンショウ属、オニグルミが検出された。水洗に当たっての留意点やサンプル量は（中村他 1998）を参照されたい。

3. 問題の設定と考察

本節では報告書で考察できなかった問題について考察を試みる。報告書での事実記載の不足は適宜補っていくこととする。

西張（2）遺跡の集落について

さて、報告書で考察できなかった問題の第一は、上に述べたような集落のあり方は、該期の集落の一般的なあり方なのか否かという点である。青森県から岩手県北部の太平洋岸・馬淵川流域では該期の遺跡が比較的多く分布している（表1）。集落の様相を知り得る遺跡は限られるが、多くは住居跡が1～2軒検出される程度のものである。一方で、下田町中野平遺跡のごとく、大型住居跡を含む多数の住居跡が重複して検出された遺跡もある。これらの遺跡と比較したとき、西張（2）遺跡はどのように評価されるのだろうか。

この問題を考察するに当たって、まず取り上げなければならないのは、各遺跡において一時期に住居は何軒同時存在したのかという問題、集落規模の問題である。住居跡が1～2程度検出された遺跡の同時存在住居跡の最大数を1～2軒ととらえることは可能だろうか。そのためには、調査区と遺構の位置を検討することから始めなければならない。図7～図11は白浜式期の遺構が検出された遺跡の遺構配置図である（遺物の出土状況などが確認できるものに限る）。実のところ集落全体の様相をとらえられた例はない。調査区が広い場合でも、調査区周縁部に遺構が存在するなど、調査区外に遺構が存在する可能性を否定しきれない。従って、他遺跡の場合、検出された住居跡が2軒程度であっても、1時期に最大2軒の住居跡があったととらえることはできない。

一方、西張（2）遺跡では、ほぼ集落の広がりをとらえ得たと考えているが、遺構の重複関係がないため、理論上は最大6軒、最少1軒の住居跡が同時存在し得たことになる。集落規模を単純にとらえることはできそうもない。

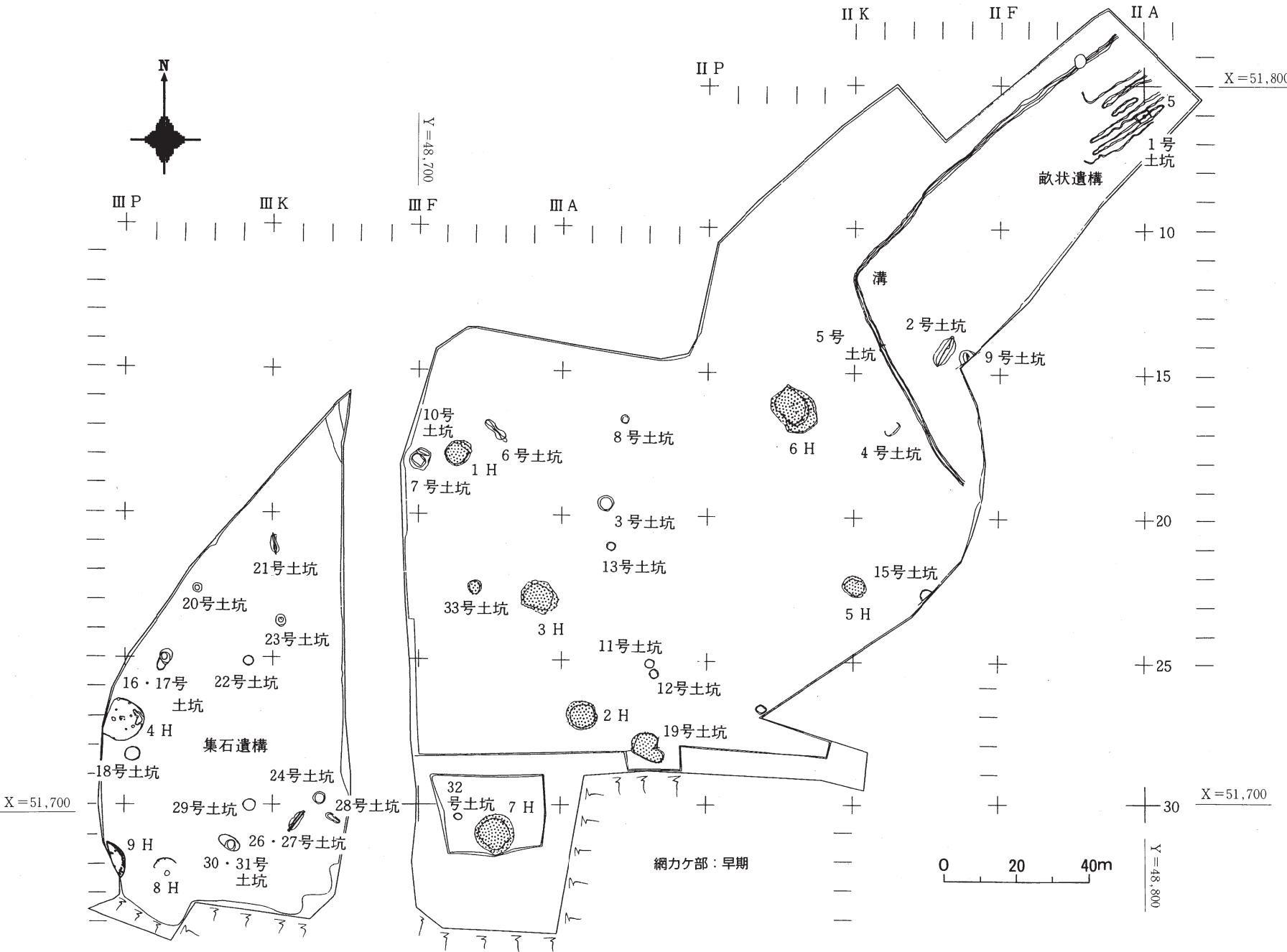
集落規模を類推する手かがりは他に求めざるを得ないようである。そこで、遺物と遺構の位置関係および遺物の接合関係について検討することで集落規模の問題にアプローチしてみよう。西張（2）遺跡では遺物の集中域は概ね住居の近辺である。住居域からはずれる15ライン以南、ⅢFライン以西では数片をのぞいて白浜式期の土器は出土していない。概ね住居から20～30mの範囲に集中している。石器・自然礫も同様である。接合関係は、住居跡出土土器と周辺の土器が接合した例がある（図3）。遺構外遺物の接合関係からは遺物の集中ブロックはA～Cの3単位に分離できる。Bブロックはさらに2～3単位程度に分離できそうだ（図5）。この遺物集中ブロックと遺構の位置関係、及び遺物の接合関係はなにを意味するのだろうか。他遺跡での遺構と遺物の出土位置の関係をあわせて検討する事にする。

表館I 遺跡II地区（図7）

白浜式期の住居跡が近接して2軒検出されている。遺物の集中域は住居からやや途切れ気味だが、概ね住居の近辺に認められる。住居跡からは、床面から遺物が数点ないし十数点出土している。土器はいずれも小片である。

中野平遺跡（図8）

報告書よれば、遺物の集中域は3カ所認められる。住居域近辺から122ラインの間（Aブロック）、



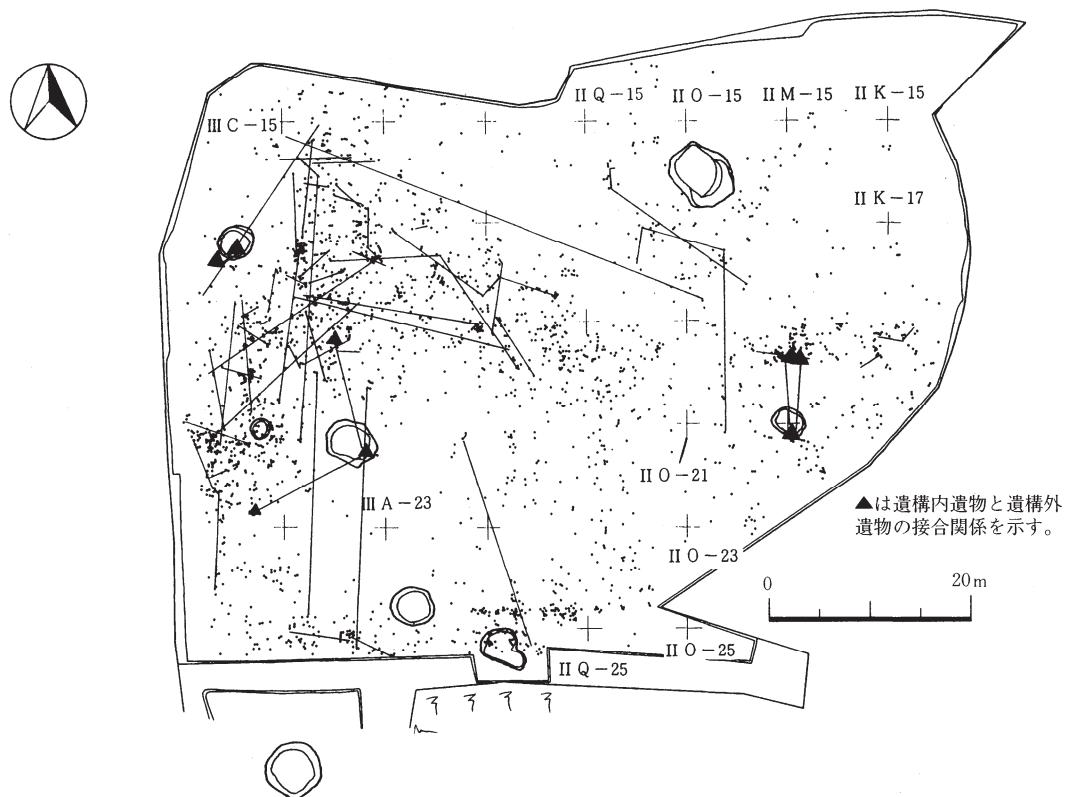


図3 土器分布・接合関係図

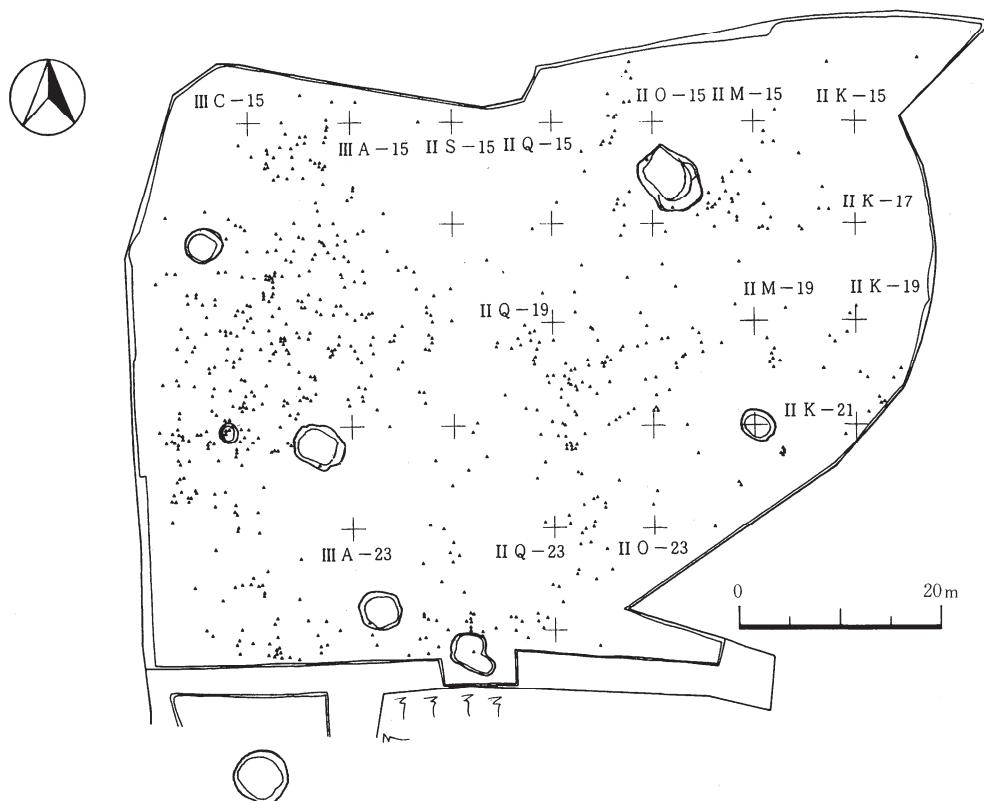


図4 石器・自然礫分布図

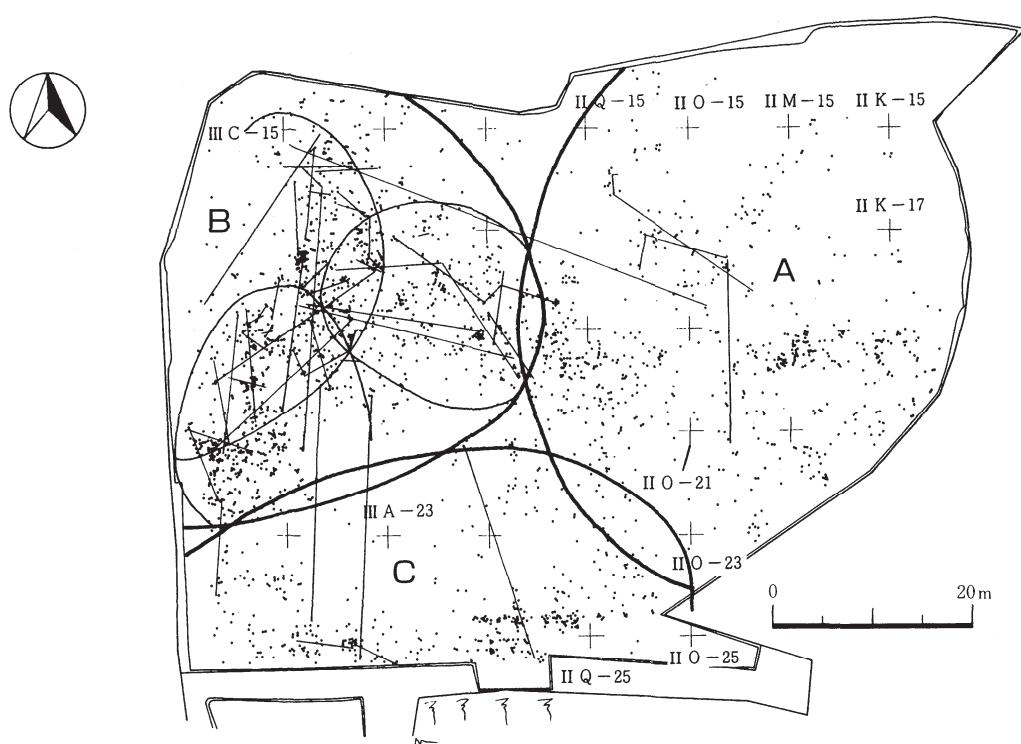


図5 土器集中ブロックの区分

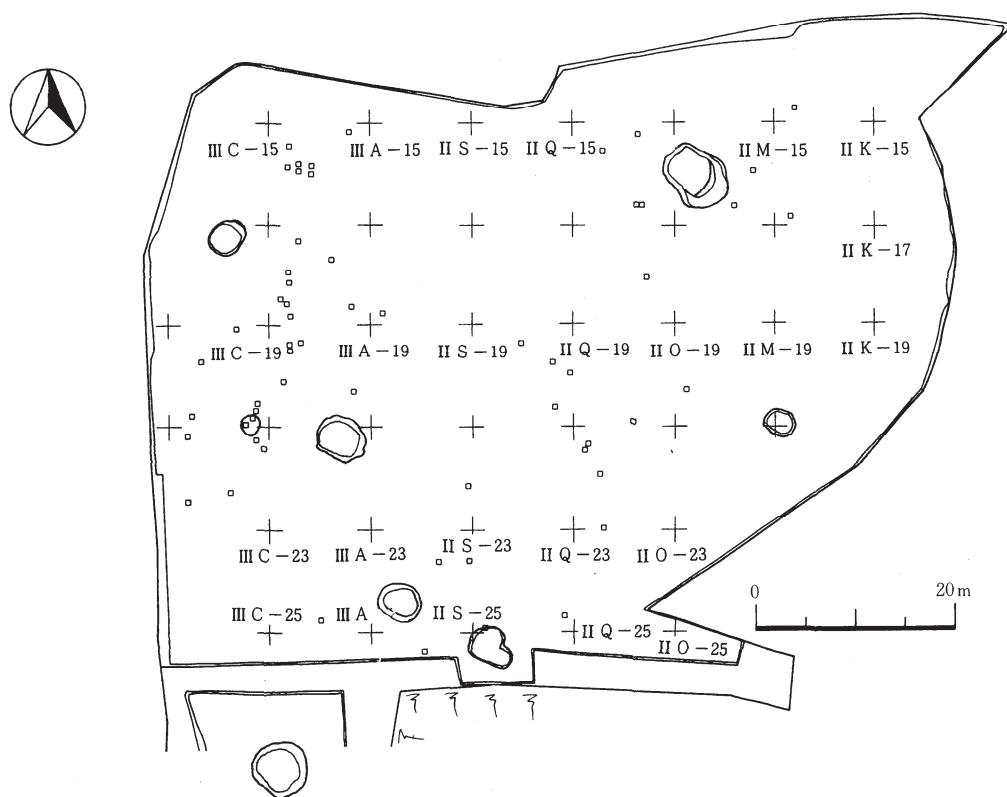


図6 焼燼分布図

I R～II A-134～137を中心とするBブロック、II H～II L-133～137を中心とするCブロックである（報文p257）。B・Cブロックは付近に遺構が認められないが、調査区外に存在する可能性がある。遺構付近に集中ブロックが認められる点では上記2例と共通する。

Aブロックでは復元可能な土器を含む多量の土器・石器が堆積土から出土する住居跡（SI101・102・103A・B・104・106・107）とあまり出土しない住居跡（SI105・108・109・110・112）がある。また、遺構内と遺構外あるいは、遺構間で土器の接合関係が認められる。

上尾駒（2）遺跡（図9・10）

報告書の記述では、「B地区の平坦部C Y～D E-20～140に分布する。数グリッド離れた土器が接合する場合があり、100m以上離れた位置から出土した土器片が接合した例もある。」とされる（報文 p397）。しかし、図版に掲載された土器の出土位置はこの限りでなく、出土状況の詳細は不明である。図版に掲載された土器の量から考えて、B区を主体に出土していることは間違いないなさそうである。この区域に遺構はほとんどみられず（註3）、C地区から該期の住居が検出されている。B区近辺の調査区外に住居が存在する可能性も否定できないが、それにしても最低で数十mは離れているとみなければならない。住居から離れたいわば「更地」への廃棄行為があつたととらえることも可能であろう。

幸畠（1）遺跡（図11）

出土土器分布図によれば、土器の比較的集中する地点は3カ所認められる。遺構とその周辺（167ラインから171ラインにかけて）、住居から離れた180から188ラインの間、190から195ラインにかけてである。出土土器の大半は第5号住居跡およびその周辺から出土している。示された分布図は百分比で、出土量の母集団が提示されていないため、量の把握をどの属性によったのか、また全体の量はどの程度なのかわからない。そのため住居跡から離れた2カ所の遺物量を集中とみてよいのか、単に少量分布しているとみてよいのか判然としないが、ここではとりあえず極端に少量（たとえば数片程度）ではないものとして扱うこととする。180～188ラインにかけては調査区外に住居跡が存在する可能性も考えられるが、190～195ラインにかけての地形は谷頭であり、間近に住居跡が存在するとは考えにくい。少なくとも数十mは離れているとみなければならないであろう。

さて、幾つかの事例を通観したところ、遺構の近辺に遺物が検出される例は一般的に認められるようである。また一方、住居から離れた場所に遺物が分布する事例もある。このように遺構と遺物廃棄のあり方には、現象面において幾つかの場合がありそうである。

- 1 住居跡の近辺に遺物が集中する例。住居内には床面近くに礫石器などがみられる場合を除き遺物がほとんどみられない。あっても小片の土器や剥片石器程度である。遺構内遺物と遺構外遺物の接合関係が認められる場合もある（西張（2）、表館（1）I）。
- 2 住居跡の近辺に遺物が集中する例。住居内には復元可能な土器を含む遺物が多量に認められる（中野平）。
- 3 住居から離れた場所に遺物が廃棄される（幸畠（1）、上尾駒（2））。

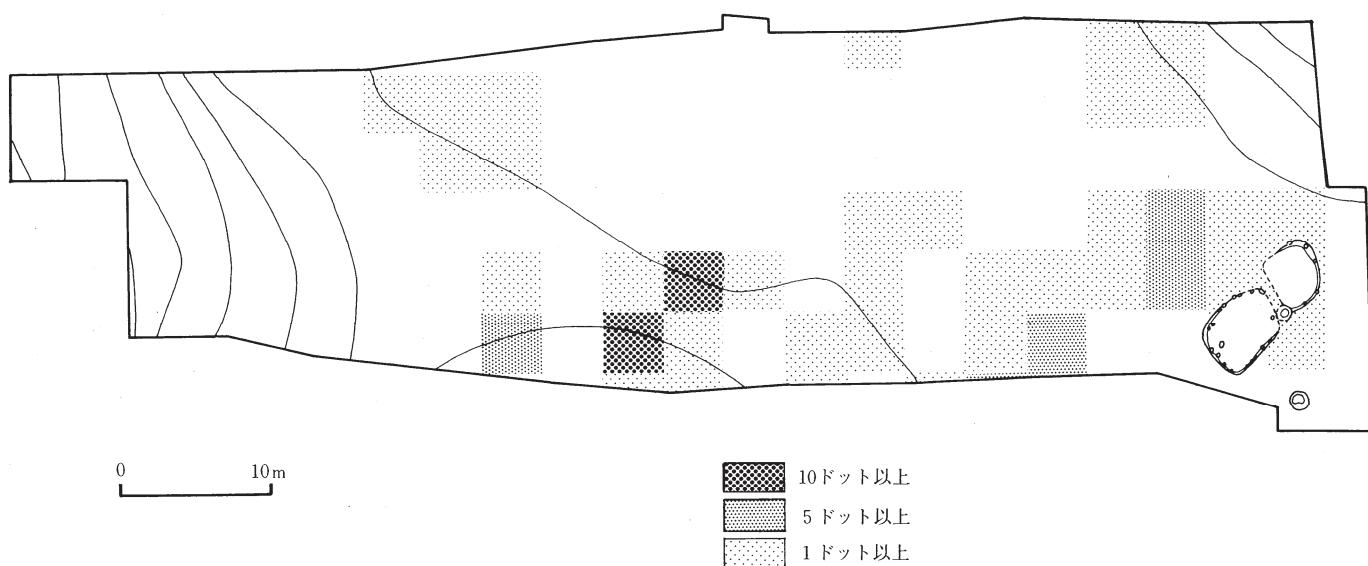


図7 表館（1）遺跡遺構配置・遺物分布図（報告書より一部改変）

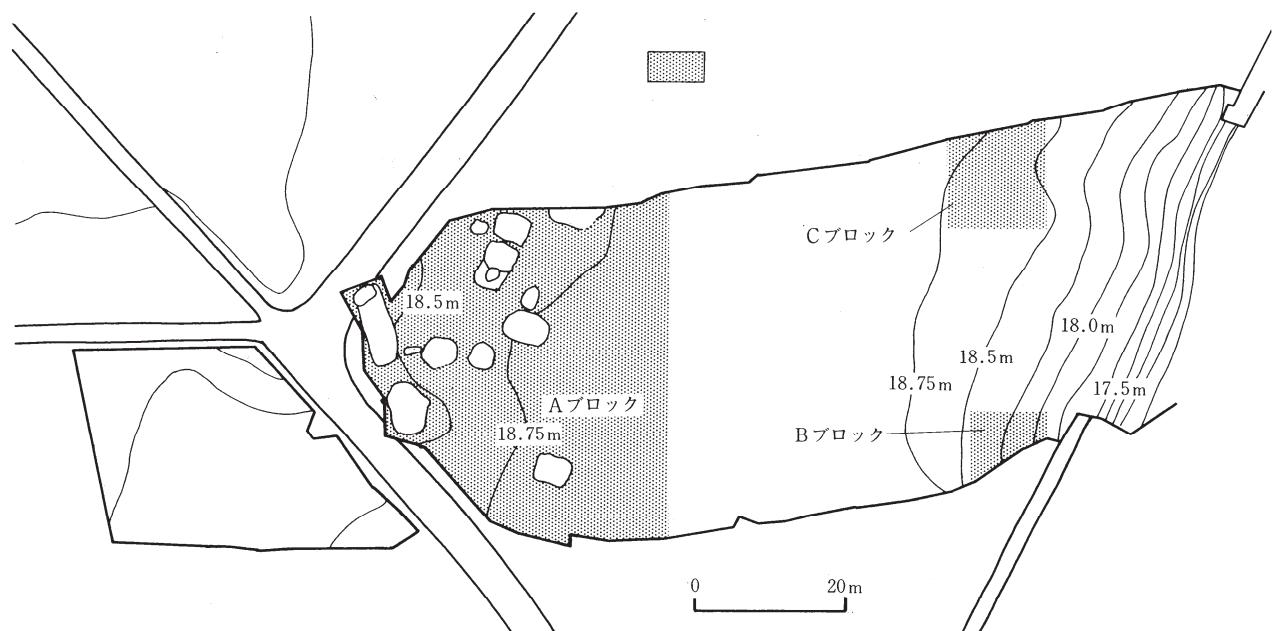


図8 中野平遺跡遺構配置図・遺物集中ブロック位置図（報告書より一部改変）

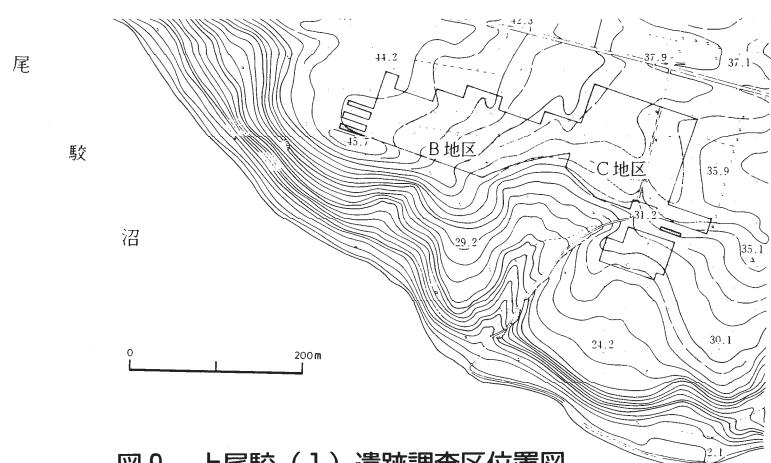


図9 上尾駒（1）遺跡調査区位置図

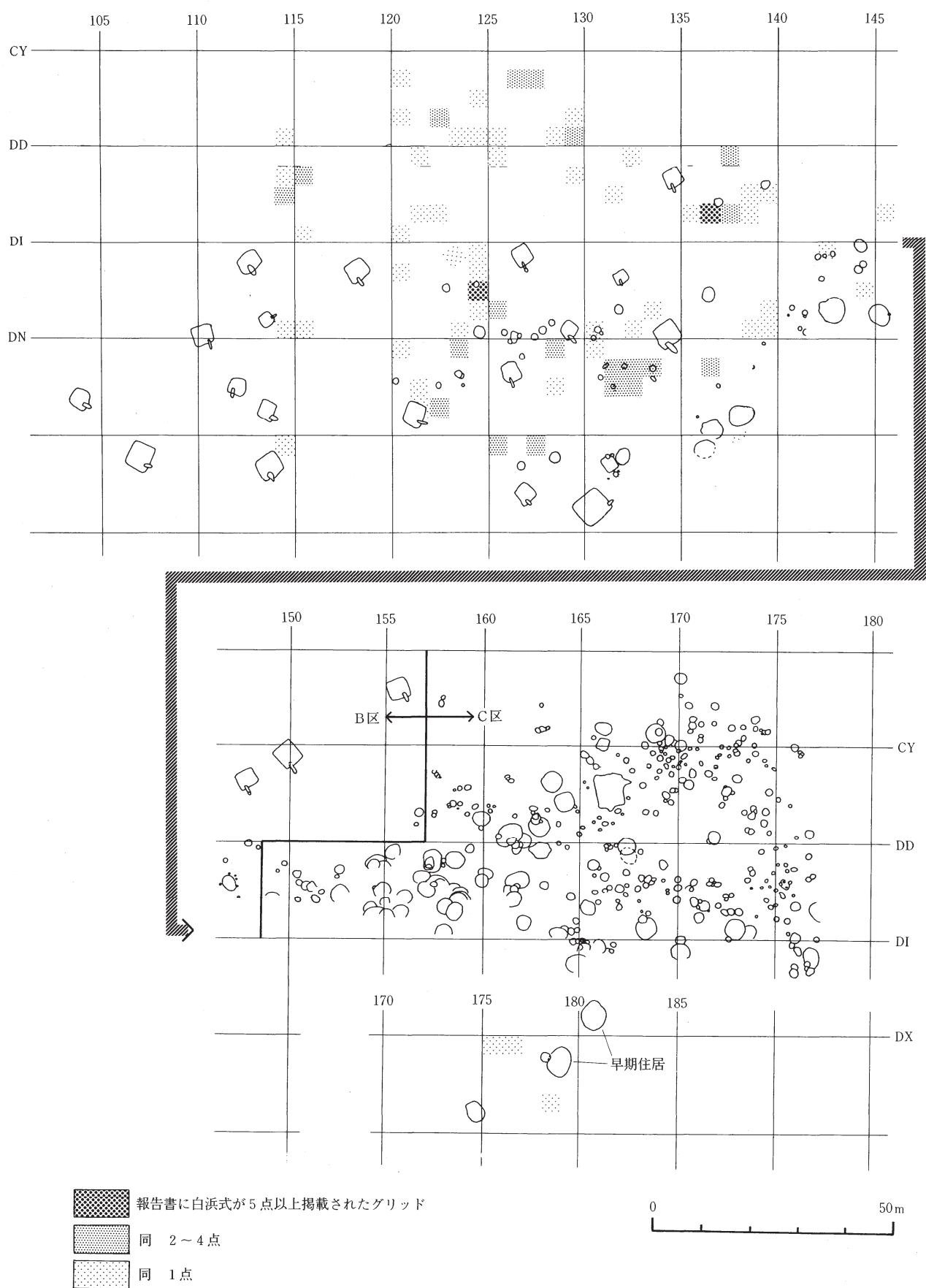


図10 上尾駒（1）遺跡遺構配置・土器分布図（報告書より一部改変）

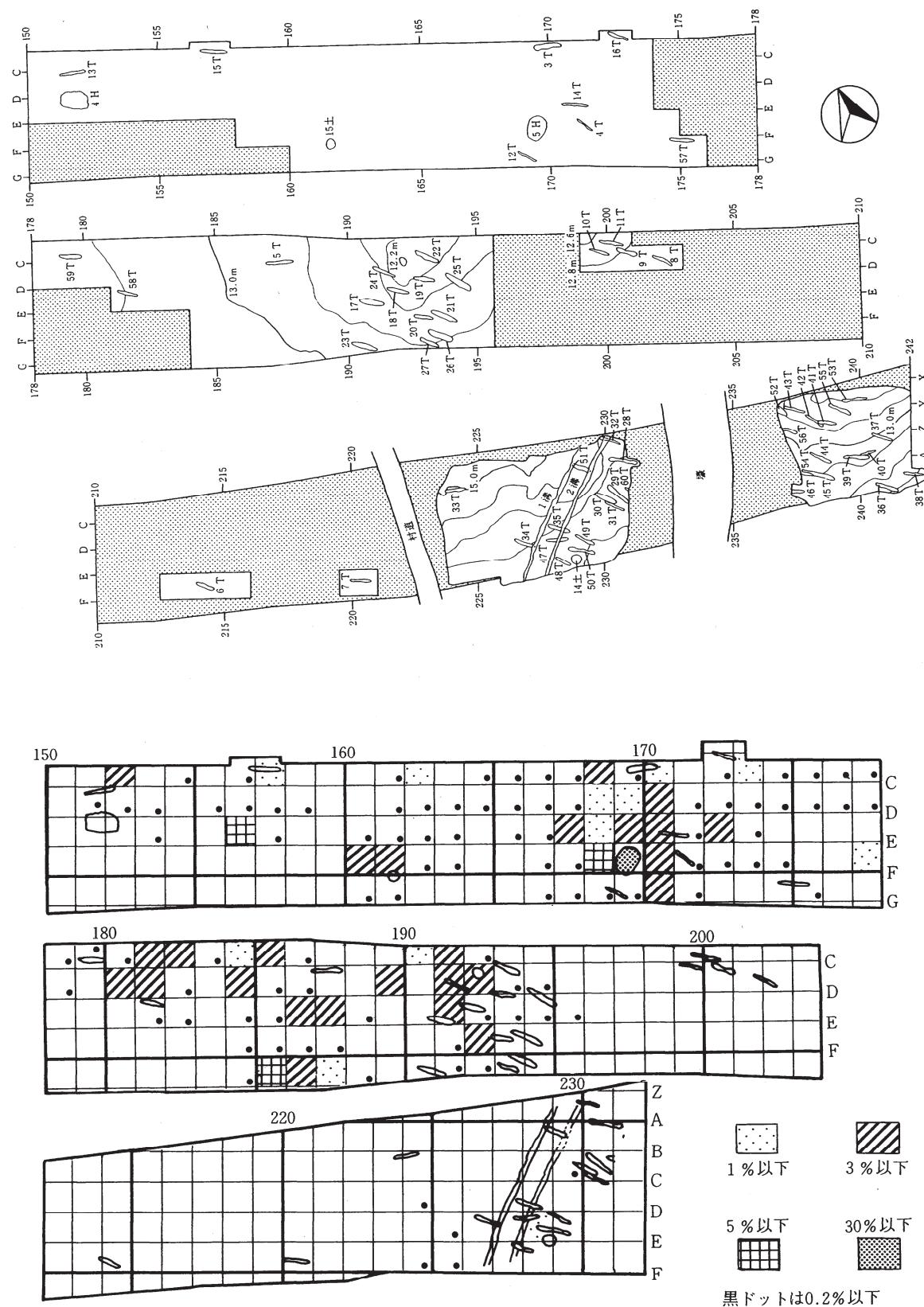


図11 幸畑(1)遺跡遺構配置図・土器分布図
(報告書より転載、縮尺不同)

では、このような現象の相違はなにによって生じたのであろうか。これについては異なる二つの仮説が考えられる。一は廃棄の主体者と遺構の関係に置き換えてとらえることで、一見異なった現象を時間の流れに沿って理解する立場である。換言すれば、廃棄行為が遺構の構築以前→構築→使用→廃棄→埋没の過程のどの段階で行われたのかを検討することで、一見異なった現象を一貫した原理の下にとらえらる立場である。いまひとつは、異なった現象の原因を場の性格や遺跡の性格に求める立場である。

今一度西張(2)遺跡の遺物出土状況を振り返ってみたい。住居跡からは土器の破片が少量出土した。いずれも小片であり、覆土から出土した。床面付近から出土する土器はほとんど認められない。礫石器・礫は床面付近から出土したものもある。覆土から出土した土器の中には遺構外の遺物と接合関係を有するものがある。しかし、これらは住居跡覆土上層から出土しており、住居の付近に残された破片が流れ込んだものと判断された。これはいずれの住居にも共通する様相である。

ここで、遺物と遺構の関連に視座を据えた研究の幾つかを概観することにしたい（註4）。金子直行氏は、埼玉県北遺跡の住居において土器型式内を大きく越えない近接した時間差に注意している。(1)炉体土器と床面土器の型式学的な差異から古い遺構の片づけを、(2)炉体土器の重複から住居跡の反復・拡張を、(3)遺構間接合から同一集落内における継続的居住の可能性を指摘している。さらに(1)～(3)を重ね合わせることで、集団移動の可能性を論じている（金子 1987）。

桐生直彦氏は、遺構から出土する遺物のあり方を、主として行為の主体者のレベルで整理している。転用、遺棄、廃棄、流入に4大別している。また、研究史の整理を行い、遺構間接合の分析が集落研究に有効であることを示している（桐生 1989）。

小林謙一氏は、炉体土器と住居址覆土一括依存遺物の接合関係の検討から縄文時代中期の廃棄のあり方を検討している（小林 1993a・b）。

いずれの研究においても、対象とされているのは床面出土土器と他遺構・遺構外の土器、炉体土器と他遺構・遺構外の土器の接合関係である。いわば、一方に時間的に限定される遺物（炉体土器や床面出土土器）があり、これとの接合関係を検討することで、土器型式に現れない（または極めて近い）住居址間の時間差などを導いている。

合田恵美子氏・小林謙一氏・桜井淳也氏は住居堆積土の遺物組成が、周辺の包含層の影響を受けている場合があることを指摘している（合田 1997、小林 1993a・b 小林・桜井 1983）。

西張(2)遺跡の遺物の出土状況は上述したとおりであり、炉体土器はおろか、床面出土遺物すらない。従って、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物の接合関係は遺物が住居廃絶後に流れ込んだことを示すものでしかない。また遺構外の出土遺物の接合関係は廃棄物（遺物）を供給した遺構を示すものでもない。上述の諸研究のごとく、事実関係を整理することで、廃棄物（遺物）が最終的位置（発掘調査における出土位置）にたどり着くまでを具体的に復元することは放棄せざるをえない。そこでやや観念的になるが、作業仮説を提示することにする。その場合上述したように二つの立場が考えられよう。

一は、上に挙げた事例のうち1と3をいわば同一の文脈で理解するものである（仮説A）。住居周辺への廃棄は、住居が使用中に行われたものではなく、現在使用している住居から数十mはなれた更地への廃棄→遺構の構築とその際の片づけ行為という時間的な関係が遺物分布図・接合図に反映しているとするものである。更地への廃棄（上記事例3）は結果としてその後何らの遺構も築かれなかったからこそ更地への廃棄として把握される。ただし、地形的な要因から遺構が築かれない場合は当然ありうる。この場合、集落規模は理論上は5軒から1軒まであり得るもの、2～3軒の集落は一般的にあり得た可能性が高いと考えることができそうである。

今ひとつは、上記事例の1と3をいわば廃棄のあり方のバラエティとしてとらえ、遺物廃棄と遺構の構築・使用に時間の差を認めないものである（仮説B）。1と3の違いを廃棄の場の性格としてとらえることも射程に含まれる。このような立場をとるなら遺物の分布図・接合関係のあり方は、住居使用中に生じたゴミ（遺物）を住居周辺に廃棄（あるいは断片を取り残した場合などもありうる）→折に触れて住居周辺の廃棄物をまとめるという形で理解されるだろう。この場合、集落規模は一時期6軒としてとらえられることになる。

では、おののの仮説を採った場合、遺物の出土状況はどのように理解できるだろうか。まず、仮説Aでは、6軒の住居跡が時間差を持っていたと考えるのであるから、最低でも2段階の変遷が想定できる。その場合、古い住居の中に土器の廃棄が認められない点が問題となる。中野平遺跡（上記事例2）や幸畠（1）遺跡で確認できたように、窪地に廃棄物を捨てるのはこの時期の集落においても十分にあり得ることであるし、縄文時代を通じて一般的に認められる現象であろう。全ての事例にこのような理解を敷衍することには躊躇もあるが、いま該期の集落においても一般的にあり得たものと考えておきたい。とすれば、時期差があるので、窪地（廃絶された住居）に廃棄物が見られないのは矛盾しているといえる。ただし、上屋構造と住居の廃絶のあり方によっては、整合的に説明されよう。つまり住居を廃絶する際、上屋を取り壊すあるいは片づけることをせず、そのまま放置した場合、住居内への廃棄は認められなくてもよい。中野平・幸畠（1）遺跡の事例から、上屋は残っていなかったと考えることも不可能ではないが、この問題は個別に事例を積み重ねて帰納的な方法で立証されるべきであろう。発掘調査に立ち戻って、住居の廃絶状態や上屋構造を追求する必要がある。

仮説Bでは、現に住居が使用中であるのだから住居内への廃棄が認められないのは当然であり、この点についてはAよりも蓋然性が高いといえる。接合関係のあり方についても、一定期間の生活の中で遺物が移動させられることはあり得ることとして理解できよう（註5）。今ひとつ、卑近な感覚に基づく疑問なのだが、現に居住している住居の付近にものを廃棄するのか、という問題がある。小林謙一氏は縄文時代中期の遺跡の分析から、住居付近の「散らかし」を想定している（小林 1993b）。このような実例からあり得ることと考えられる。全体としては仮説Aよりも無理なく説明できる。

しかし、仮説Aも棄却されたわけではない。いずれかを判断するためには今後発掘調査に立ち戻って考えねばならない。仮説A・Bともに西張（2）遺跡の分析のために提示したものではあるが、基本的な考え方は事例1・3に示した他の遺跡にも一般化する事ができるだろう。そこで、以下に仮説を証明する要件を考え得る範囲で示すことにする。仮説Aが証明されるための要件はまず時期差を確認できる遺物の出土状況が必要である。また、既に指摘したように住居の廃絶状態の検討も必須である。状況証拠としては、遺物集中ブロックが、明瞭に分割されて、その先後関係を想定できることも挙げられよう（註6）。仮説Bについては、床面遺物と遺構外遺物の接合関係が直接の証明となろう。住居周辺の散らかしの一方、（後に住居が構築されそうもない地点の）更地への廃棄を認めることになるので、該期集落における場の理解が必要となる。そのためには、遺物の出土状況の詳細な記述・分析が求められよう。

西張（2）遺跡は、中野平遺跡のように遺構の重複や窪地（窪地周辺も含めて）を利用した遺物の廃棄が認められる遺跡とは性格が異なることも予測されよう（註7）。しかし、西張（2）遺跡を遺跡相互の中で評価するにはなお多くの事例の積み重ねが必要である。

炭化した大型植物遺体について

1.で述べたように、早期住居跡のうち、第6号住居の貼床について水篩選別を実施し、少量の炭化した大型植物遺体を得ることができたが、報文中では同定結果を提示するにとどまった。ここでは、その意義について若干の私見を述べてみたい。

まず、若干の事実の補足を行う。水洗を実施した量は1×1mグリッド19区分を1区につき500cc2サンプルである。水洗後、作業員がルーペの観察下で土砂と炭化物を分別した。分離した炭化物は当センター職員齊藤由美子が炭化種子と炭化材に分別し、炭化種子は株式会社パレオ・ラボに分析を委託した。分析の結果、オニグルミとサンショウ属？が検出された。

サンショウは初夏の未成熟な種実を利用することも可能である。また、秋の成熟した果皮を利用することも可能であり、乾燥させれば長期の保存が可能である（註8）。オニグルミは秋に採集するが、長期の保存が可能で、軽く、可搬性もあり、消費された遺跡が採集された遺跡と同一である必要は必ずしも無いのではないか（註9）。いずれにしても、今回得られた資料は食料採集・消費の季節性を明らかにしうるものではないと思われる（註10）。

では、土壤を選別して植物遺体を回収する意義はどこにあるのだろうか。上記したように、仮に遺跡に性格の差があるのなら、遺跡によって、獲得した植物質食料の組み合わせに差異が認められはしないだろうか。仮に、生業と居住のシステムにおいて季節的な出小屋と母村的な関係が認められるならば、食料獲得の季節性が、出土した植物遺体に反映されはしないかということである。また、近年ではヒエの利用が縄文時代早期後半まで遡ることが確実となった（（財）北海道埋蔵文化財センター1998）。更に遡る可能性が見えてきたともいえよう。更にいえば、縄文時代の植物質食料の変遷をとらえる基礎データとしても位置づけられる。これらの視点に答えるのに炭化した植物遺体の検出だけで十分とは思わないが、一つの手がかりとして必要なことであろう。本県においてこの時期の水洗選別が実施された例はほとんどなく、基礎的なデータの集積が必要である。その際、住居の廃絶状態の検討等の視点は重要となろう。

4.結語

報告書作成時に触れることのできなかった問題について考察を試みた。その結果、なお多くの基礎的データを集積することが必要であることを痛感した。翻っていえば、これまでにあまり議論がなされず、議論が調査に還元されなかった事を示しているようにも思われる。自省とともに今回の考察を今後の調査に生かしていきたい。なお、土器の編年上の位置づけについて若干述べたいこともあるが、機会を改めて述べることとした。

註

(1) 報告書では、第3号住居跡出土土器観察表の2の土器について、「1H・P-3と遺構外P-819・1009接合」と記載されているが、「3H・P-3と遺構外P-819・1009接合」誤りである。訂正するとともにお詫び申し上げたい。

(2) 出土位置を記録して取り上げた破片2,348点のうち、174点が接合した。接合率は7.4%である。出土位置を記録しないで取り上げたものもあり、これらと接合するものもある。これらを加えれば接合率は更に低くなるものと思われる。

(3) B地区では該期の土坑とされるものが2基検出されている。しかし、遺物はいずれも該期の土器とみられる小片が1~2片掲載されているにすぎない。流れ混みの可能性も否定できないであろう。また、確認面と基本土層との関係も不明である。なぜそれが早期であるのか、報告書から根拠を読みとることはできない。

(4) 本来触れなければならない研究は数多い。しかし、入手できなかつたため触れ得ない文献が多々ある。また、筆者の怠慢により十分にその意図を咀嚼できなかつたものも多い。今後の課題としたい。

(5) ABどちらをとるにせよ、遺物の接合関係は人間の活動により廃棄された遺物が移動させられることは変わらない。本県における縄文時代早期の遺跡ではしばしば相当の距離をおいて出土した遺物が接合することが指摘されているが、人間活動によるゴミの移動が一般的であったことを示していると思われる。更にいえば、該期以外の遺跡においても一般的に認められると思われるが、これまでほとんど注意されていない。遺物の出土量や出土状態に一因があるものと思われる。

(6) 具体的には以下のようない例が想定される。2軒の住居跡が検出され、一方に遺物集中ブロックが認められ、一方には認められない。あるいは更に幾つかの住居跡があった場合でも上のような状態に分離可能である場合。

(7) 中野平遺跡は4時期の変遷があり、各時期3~4軒、最大6軒の住居が存在したと想定されている。接合資料の検討から得たものではなく、遺構の重複・住居の構造・遺構間の距離・軸方向等から想定されたものである。第一次的な資料による証明ではないものの、複数時期があることは確かであろう。これを長期の継続居住の結果と見るか、反復居住（石井 1977）の結果と見るかはおくとしても、利用される頻度の高い遺跡であった事が指摘できる。

(8) 筆者の実体験による。現在、一般的にどのような利用法があるのか資料は収集していない。

(9) この問題を検討するためには量的な評価が必要となろう。その場合、炭化種実のみでは評価が難しいかもしれない。

(10) 得られた資料が限定されるのは選別を行った資料の量に起因している可能性もある。その意味では更に水洗選別を行う必要がある。

参考文献

合田恵美子 1997 「豎穴住居の覆土形成に関する一考察(IV) —覆土と周辺包含層の土器出土状況の比較から—」『東京考古』15

青森県教育委員会 1988 『上尾駿(2) 遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告
1990 『表館(1) 遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集
1991 『中野平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
1998 『幸畠(4) 遺跡・幸畠(1) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告

石井 寛 1977 「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

中村哲也他 1998 『西張(2) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第233集

金子直行 1987 「VII 発掘成果のまとめ」『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財事業団

桐生直彦 1989 「住居址間接合資料の捉え方—現状認識のためのノート—」『土曜考古』13 土曜考古学研究会

小林謙一 1993a 「第IV章 第2節(2) 縄文中期分析のための基礎データの整理」『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第1巻 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室
1993b 「縄文遺跡における廃棄行為復元の試み —住居覆土中一括依存遺物及び炉体土器の接合関係—」『異貌』13 共同体研究会

小林謙一・桜井淳也 1983 『早川天神森遺跡』

財団法人北海道埋蔵文化財センター 1998 『函館市 中野B遺跡(Ⅲ)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第120集

宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

前号の訂正のお願い

前号（第3号）の中村・坂本論文に誤りがありました。下記の通り
訂正をお願いいたします。

	誤	→	正
p58 16行目	29棟検出されてい 2類16棟 2b類6棟		26棟検出されてい 2類12棟 2b類2棟

17行目	3a 2類1棟	3a 2類.3棟
------	---------	----------

p60 16行目	現象と関連する	減少と関連する
----------	---------	---------

p61	39	幸畠(1)S104	2b	39	幸畠(1)S104	3a2
	40	幸畠(1)S104	2b	40	幸畠(1)S104	3a2